

三 日本山岳写真協会創立85周年特別寄稿 三

戦後復興期の「JAPA」入会までの波乱記

『会に入るのが大変だった』

◎昭和26年新入部員30名

部員8名+30名で38名の大世帯になる。勇者だそうだが先輩として力を見せるため、戦災で焼け残った約20mのボロボロの煙突にザイルを担いで天辺に登り避雷針にザイルを引っかけて一気に懸垂降下、二年後、危険のため煙突登り禁止令がでた。

◎第一回新人合宿・谷川岳

中島きよしさんの土合山の家に一泊。一の倉沢、雪渓とすらぶ岩登りを楽しみながら訓練する。翌日は二の沢から東尾根に登り頂上のオキの耳を往復、西黒尾根を下って土合に戻って合宿終了。谷川岳の恐ろしさを知っているだけに達成感があったと思う。大学山岳部のシゴキや脱走事件、遭難事故が新聞沙汰になっていた時期だけに我々弱小山岳部はシゴキは禁止。OBによる「監督制度」を作るようにした。70年間続いている。

◎新設「涸沢ヒュッテ」とは仕事は？

ヒュッテといっても山荘ではなく大テント張り、通称河童のおやじさんと二人で全てを管理することで楽な仕事ではなさそう。食事の準備・後片づけ・テント内の掃除・寝具の準備・天日干し・必要品目の伝達と水・味噌・缶詰等食品のポッカ、横尾まで駆け下り荷運び、足腰強くなりました。一ヶ月の避暑と穂高三山の登山が出来るのは幸せなこと。

◎第一回夏山合宿・槍穂高山界

初めての合宿で登山用具は一応部費で賄え、個人装備はなんとかかなるが、一番の問題は合宿費用だ。交通費・食主副費・宿泊費・その他雑費+予備費込で三千元(当時大卒初任給はよくて六千元)。アルバイトなどできぬ時代のため、部員38名中8名に減少。

◎夏山合宿スタート

7月17日夜行列車で新宿をスタート、バスで上高地着。一泊目は横尾の朋文堂テント、翌日涸沢ヒュッテ着。三日目A斑北穂・槍ヶ岳往復。B斑前穂三峰フェイスのロックク



約60年前、雑誌に掲載された「新雪の北穂高東陵に行く」＝中野 慶一氏作品

名誉会員・会員 No.40

中野 慶一

ライミング。草鞋に履き替え中野トップの三人組、前穂奥穂を経てザイテンの雪渓をグリセードで一気に下る。快適なり！涸沢に戻ると後登隊(女子部員と担当教師と先輩)到着。

夜はカレーライスで歓迎会。毎日快晴で快適な登山ができた事、大満足したようだ。涸沢ヒュッテに五泊(一泊30円)して下山になったが無事帰郷できるよう大橋前部長にお願いした。合宿終了。

◎オリンピックスキー強化合宿スタート

7月24日合宿開始。選手猪谷千春(大泉高校生)・杉山進・山崎・藤沢君ら若手選手の面倒を見てくれ、勿論寝泊はヒュッテで猪谷六合男さんらコーチ陣は涸沢小屋泊だが我々若手は楽しい合宿となる。ヒュッテとは関係ないが、日本スキー連盟の小林博士夫婦を上高地から案内してくれと言われ、翌早朝上高地に下り涸沢まで案内する。選手諸君とテント内はおしゃべり三昧賑やかに過ごす。

◎雪渓滑落者救助

前穂3-4の科尔より下っている時ザザーと振り向くと雪渓を滑り落ちてくる若者が危なく飛ばされる所、避けるとそのまま滑り落ち亀岩にぶつかり飛び跳ねてぐったり、涸沢まで下り救助を頼む。近くにいた千春さんがスキーを履いたまま患者を背負い涸沢まで運ぶ。今だったらヘリもあるが背負子に繰り付け上高地まで運ぶ事になり涸沢小屋の若い衆と青学の猛者とヒュッテから45kgの私が担ぎ降ろさなければ、60kg以上ある動く荷物の重いこと、患者と変わりたかった事、三交代でどうにか上高地に到着・・・バテタ！

◎東宝映画「大雪渓」谷口千吉監督、穂高ロケ
その頃お客さんも少なく三日間ばかりロケの追っかけマンになって奥穂高の山頂近くで良いカットを撮るようにした。主役は上原謙と島崎雪子。

8月に入ると客足も遠のく。5日ごとに横尾の五右衛門風呂に入るようにしており、行き帰りにはあずみ節など歌いながら歩む。

◎涸沢ヒュッテとのお別れ

7月22日から8月28日の38日間、涸沢ヒュッテに努めた事、これからの人生では全く無いと思う。

◎卒業まであと半年、就職対策

急成長した会社に内定したが、研究課題が出され数ヶ月猛勉強が必要となった。入社すれば、一番高額の初任給となる見込みだ。

◎卒業後、写真学会、印刷学会とようやく念願の日本山岳写真協会に入会出来た。